

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十七年九月度 入選句（投稿総数千九百四十九句・一般投句数七百八句）

選者 名和 永山

特選

虫の夜や 次の頁に置く葉 大垣市 棚橋 みさを

「虫の夜」で様々な虫の音色が浮かんできます。読書している最中に、ふっと耳に入った虫の音に、作者は「色々な虫の音」に耳を傾けたのでしょう。「虫の夜や」のこの切れが次に何するのかなという、読者への興味をそそります。「次の頁に置く葉」で、一時、読書を休んで、素晴らしい虫の音色を楽しんだ様子が浮かんできます。

「長き夜や」ではなく、虫の音だからこそ、この句が生きてきます。「長き夜」では、平凡ですが、この季語が生きた俳句になっています。季語や切れが活かされ、また、「中七」後のリズムも良い佳句となります。

果実酒の彩深めゆく良夜かな 養老郡養老町 田中 秀子

「良夜」今年の満月は素晴らしかったですね。月は日に日にその大きさや輝きが異なります。そして、満月に近づくにつれ、月光にあたる地上の万物の色が深まってきます。その少しの変化を「果実酒の色（彩）の深まり」と重ね合わせたのでしょうか。果実酒も目を重ねることに、彩と味もふかまってきますよね。「良夜」の季語が活かされています。

秋の夜やふいとメールのしたくなり 大垣市 傍島 隆

「秋の夜」は、なにか淋しい、切ない夜ですよ。その時に侘びしさを埋めることが出来るだろうと、「ふいに」メールがしたくなったという、作者の想いが込められています。そんな作者の心が伝わってきます。「長き夜や」となると、時間があるので、メールをしたということになりますね。これでは「心」がわかりづらくなります。「秋の夜」だからこそ、心が伝わってくるのです。季語の持つている本意を使うと、季語が『二重』に活かせるものです。

秀逸

伊吹嶺のよく見ゆる朝大根蒔く 安八郡神戸町 高橋 日出美

風すこしあれば幸せ秋桜 養老郡養老町 田中 紫香

音もなく咲きて消ゆるや遠火花 大垣市 寺澤 弘

硝子戸の守宮に夜の灯を消しぬ 不破郡垂井町 児玉 昌巳

内緒話したくて亡夫に門火焚く 愛知県名古屋市 小松 とみゑ

夕暮れの空に混じえる赤蜻蛉 大垣市 杉浦 聖代

老いてなどをれぬ余生や大根蒔く 大垣市 村田 通夫

食すより骸の多さや焼き秋刀魚 大垣市 林 ひとみ

満月を盆に浮かべてひとり酒 大垣市 高橋 柳邦

水揚げの秋刀魚荷台を零れ落つ 岐阜市 堀江 美州

入選

百日紅こぼれて村の辻地蔵
駅下りれば出迎へのあり赤蜻蛉
賽銭の沈む御手洗水澄めり
拘りて今も七輪秋刀魚焼く
秋闌くる伽藍に光る葵紋
蝸や老いゆく母の憂い聞く
遠雷に犬の寢床の定まらず
母の歳越へて糠漬胡瓜茄子
墓参り杖持つ身には遠くなり
城に似た夏雲立つ日里帰り

岐阜市

伊藤 瑞実

愛知県岡崎市

矢田 あさの

大垣市

安部 芳枝

不破郡垂井町

富田 実郎

大垣市

森川 きよ子

大垣市

山田 千歌子

不破郡垂井町

北村 廣美

不破郡垂井町

服部 智恵

大垣市

河合 秋信

大垣市

平野 ヒサエ

入選

星月夜二人で歩き語る夢
どの径をゆくも山墓吾亦紅
たそがれの空に聞えゆく虫の声
風の盆胡弓泣かせる白き指
朝顔や庇まで延び千代女の匂
そろりそろ鈴虫の声幼かり
蓮立花うしろ姿のりりしかり
尼寺に続く小道に萩咲けり
法師蟬今一時を思いきり
ネクタイの結び目緩む晩夏光

大垣市

栗田 基弘

静岡県沼津市

堀野 一郎

揖斐郡揖斐川町

衣斐 圭介

大垣市

新町 恵子

不破郡垂井町

高木 しげ乃

安八郡神戸町

大槻 恭子

大垣市

河合 栄雲

大垣市

平野 きぬよ

大垣市

大角 信華

岐阜市

石崎 宗敏

選者吟

そよ風にうなづき揺るる吾亦紅

永山